

平成22年度「岩手・生と死を考える会」活動報告

中村 一基*・千田 浩**

(2011年3月4日受理)

Kazumoto NAKAMURA, Hiroshi CHIDA

The 2010 Report of the Committee on Considering Life and Death

(1) 中村代表あいさつ

僕たちは、とにかく、一步一步進むしかない。今は、日々の実践を絶えることなく、継続していくしかないと思っている。その結果、どのような形になっていくのか、いわば《成り行き》に身をまかせている状態である。そのような状態の中から、姿を現してくるものを感じている。《無縁社会》の広がり、ひしひしと感じながら。「生と死を考える」ことは、誰も避けて通ることはできない。千田君や阿部君との、《対話》は続いている。

(2) 「岩手・生と死を考える会」の活動について

本「岩手・生と死を考える会」は、「生と死を考える全国協議会」の活動目標である「死への準備教育・ホスピス運動・死別体験者のわかちあいの場づくり」という3つの目標を意識しながらも、設立時の場の設定として、「(1) 教育現場における『生と死の教育』『死への準備教育』についての学習の場とする。(2) 生涯学習の一環として上記の教育について、総合的に学ぶ場とする。

(3) 『総合演習』(大学での演習・中村担当)の発展の形も取る。」と定めており、最終的には岩手県の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラムの開発作成・実践を目指している。この点

が、本会の最大の特徴である。全国に53ある「生と死を考える会」の中でも「死への準備教育」に活動を特化していることが、本会の売りである。

代表を務める中村教授も、「岩手県教職員10年経験者研修」《現代的な教育の諸問題》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」を担当しており、平成22年度で第7回を数える。本研修は、岩手県教育委員会主催の研修の一環であり、このような形で、教員が「生と死の教育」を学ぶ機会がある県も全国的には珍しいと考える。残念ながら、諸般の事情で開催日程が、昨年度から1日の設定となった。(一昨年度までは2日間の日程であった。)

(3) 活動の状況

平成21年度

第1回(2009/4/25・通算100回)「死生学といのちの教育(平成21年度総合演習報告)」「センター紀要について」(担当:中村)、「いのちの教育ハンドブック第3集について」(担当:千田)懇親会

第2回(2009/5/23・通算101回)「芥川龍之介『羅生門』について」(担当:千田)

第3回(2009/6/20・通算102回)「高校国語教科書『国語総合』に見られる『生と死の教材』一覧について」(担当:千田)

第4回(2009/7/18・通算103回)「東京・生と死

* 岩手大学教育学部教授、** 岩手県立水沢高等学校教諭

を考える会発表レジメ」(担当:阿部)

第5回(2009/8/1・通算104回)「東京・生と死を考える会研修会報告」(担当:阿部)

第6回(2009/9/5・通算105回)黒崎政男「クローン問題と現代の幻想」、山崎正和「サイボーグとクローン人間」(担当:千田)

第7回(2009/10/3・通算106回)森岡正博「『からだ』と『こころ』」(担当:千田)

第8回(2009/10/30・通算107回)柳沢桂子「生命と死の歴史から」(担当:千田)

第9回(2009/11/28・通算108回)池内了「もろともに宇宙の微塵となりて」(担当:千田)、「教職員研修10年研について」(担当:中村)

第10回(2009/12/19・通算109回)「教職員研修10年研について」(担当:中村)「生と死を考える会についての全国の動向」「平成21年度活動報告」(担当:千田)忘年会

第11回(2010/2/13・通算110回)「高校国語教科書『国語総合』に見られる『生と死の評論教材』のまとめ」(担当:千田)

第12回(2010/3/20・通算111回)「葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』」「『いのちの教育ハンドブック(2009)第4集』」(担当:千田)懇親会

平成22年度

第1回(2010/4/24・通算112回)「宮澤賢治『なめとこ山の熊』①」(担当:千田)懇親会

第2回(2010/5/29・通算113回)「宮澤賢治『なめとこ山の熊』②」(担当:千田)

第3回(2010/7/3・通算114回)例会「高等学校道徳教育全体計画について」(担当:阿部)

研究会「志賀直哉『城の崎にて』」(担当:千田)懇親会

第4回(2010/9/4・通算115回)「改正臓器移植法」(担当:中村)懇親会

第5回(2010/10/2・通算116回)「新指導要領における道徳教育の概要」(担当:阿部)懇親会

第6回(2010/11/13・通算117回)「夏目漱石『夢十夜』」(担当:千田)

第7回(2010/12/18・通算118回)「教職経験者10

年研修会〈生と死から学ぶいのちの教育〉」(担当:中村)

第8回(2011/2/19・通算119回)「センター紀要について」(担当:中村)、「『いのちの教育ハンドブック(2010)第5集』について」(担当:千田)、「道徳教育ハンドブックについて」(担当:阿部)

第9回(2011/3/26・通算120回)「平成22年度のまとめ」(担当:千田)

(4) 今年度の活動について

2003年に設立した本会は、上記のような活動を継続している。会員同士の日程の調整がなかなか難しいということはあるが、なんとか最低限の月1回のペースを崩さず、持ちこたえているといった状況である。

今年度は、特に高校の国語の教科書である『国語総合』の小説教材に絞り、「『国語総合』に見られる生と死の諸相」を中心に、指導案の検討や教科を跨る指導法の模索を前年度から続けている。

また、今年度は本会所属の阿部也寸志1会員が、本県の教育委員会からの委嘱を受け、「道徳教育ハンドブック」「岩手県高等学校道徳教育資料」の編集に携わっている。来年度は、その資料を活用しての道徳教育実践が、「生と死の教育」とどのように係わるか、また重なり合う部分の検討等にも取り組んで行きたいと考えている。

昨年度の岩手県内での全国的なイベントとしては、「第34回日本死の臨床研究会年次大会～地域で看取る～」が挙げられる。2010年11月6日(土)・7日(日)の2日間の日程で、盛岡市民文化ホール(マリオス)で開催された。市民公開講座として、青木新門氏の「『いのちのバトンタッチ』—映画『おくりびと』によせて—」と木村秋則氏の「奇跡のりんご」の2講演があった。本会でも会員の研鑽の場として拝聴することができた。

今年度は、本会の活動の目玉である「教職経験者10年研修会〈生と死から学ぶいのちの教育〉」の記録を鈴木会員が取ってくれた。参考資料として、本記録の最後に掲載する。

(5) 今後の方向性

全国的には全体的に低調とも言える「生と死を考える会」の活動ではあるが、一部の先生方の試みは注目され、また天才的とも言える授業技術を発揮して展開されている。本会は、普通の教師が普通に実践できる授業カリキュラムの開発を模索し、今後とも「生と死を考える会全国協議会」等の動向も視野に入れつつも、岩手独自の活動を展開していくことを目指している。また、全国でこの教育に携わっている先生方は、研究会等で話を聞くと、連帯ではなく、孤立感を持っているというのが実情であるという。そのような先生方とも

交流しながら、今後も「生と死の教育」の実践・普及のために取り組んでゆきたいと考える。

年度末には、今年度の活動の総括として、「岩手・生と死を考える会」編集の『いのちの教育ハンドブック第5集』発刊予定である。今までの活動を蓄積しつつ、来年度の活動を地道に続けていきたい。

《資料編》

*平成22年度 教職経験者10年研修《生と死から学ぶいのちの教育》の研修記録。記録者（鈴木仁志）。

平成22年度 教職経験者10年研修 《生と死から学ぶいのちの教育》									
平成22年12月27日 於：岩手大学総合教育研究棟									
【午前の部】									
中村	<p>まず、私自身は今回のテーマである「生と死の教育」をプロパーにやっているわけではないことをお伝えしたい。今回は教え子が2人参加しているが、小田島先生が在学しているときには扱っていなかったテーマであり、5年ほど前から始めたテーマだった。本業は国語であるが、自分自身が現実感のない人間でもあり、日本の精神史を探り、その中で生と死の境界線というものに触れる機会が多くあった。</p> <p>そもそも1回目の教職経験者10年研修会では、本日の参加者でもあり、当時みだけ養護学校奥中山校に在籍していた阿部先生が参加していたが、当初は想定していなかった特別支援学校の内容を現在加えているのも彼の参加が大きな理由だった。</p> <p>そもそも5年前の本研修の開講当初は、このテーマは一般的ではなく、周囲からは変わったことをしているという目で見られた。しかし今では資料や書籍がたくさん出版されており、情報は溢れている。問題は、それをどのように現場でやっていけるか、どのように教えていけばいいのかという点である。昨今叫ばれるゆとり教育による問題や、総合学習との兼ね合いなど、学校現場のどこに位置づけられるかも未だ曖昧である。また、そもそも生徒に教える前に、自分たち教員がどのような死生観を持つべきかということも、実際に踏み込みにくい理由の一つと言われる。今回はディスカッション形式の研修を中心とした上で、お互いに色々な疑問をぶつけ合いながら、何かしらを持ち帰ってほしい。</p> <p>では、今回参加される先生方に自己紹介を受講理由や想いについて述べていただきたい。</p>								
三浦	<p>私は中学校理科の教員で、いのちの教育という分野では「生まれる」ということをメインに扱っている。未だに私自身が身近な人間の死を経験していないため、死というものに対する観念が自分の中で薄い。しかし、生まれることがあれば死ぬこともあるんだな、ということを年々漠然と感じており、教科の中で生殖や受精のことを教えるのも、いのちの教育の観点で見れば何か意味があるのだなと思えるようになった。</p> <p>また、義理の父が闘病生活を送っているのだが、そのことを自分に隠していた。きっと本当は辛かったのだと思う。世の中に簡単に死んでいく人がたくさんいて、身の回りにも自殺を考えた生徒の存在があった。授業で生徒たちに伝えられることを、今日は学んでいきたい。</p>								
本間	<p>私は特別支援学校の中学部に所属しており、年に1度性指導を行っている。特にパーソナルスペースやいのちの教育などをメインに扱っている。しかし、自分の経験を振り返ってみると、誕生をテーマにした授業はたくさん扱ったが、死について扱った授業は受けたことすら無いことに気付いた。</p> <p>また、生命や死というものを実感することも、やはり身内の葬儀に参加したり、実際に遺体に触れたりして初めてできる気持ちだと感じた。祖母が亡くなったときに自分の子どもたちが彼女に触れて何かを感じているのを見て、そう思った。</p> <p>子どもたちにこのテーマをどう伝えればいいのか、それを特別支援学校の視点から教わっていきたい。</p>								

伊藤	<p>私は病弱・虚弱な子どもを対象にした支援学校に所属していて、現在は岩手医大の院内学級で仕事をしています。そこでは重症患者も多く、教え子がかかりの数亡くなっている。死期が間近な子どもたちに何ができるかを考えていきたいし、一緒に勉強してきた仲間が次々と亡くなっている状況にある周囲の子どもたちへの支援のあり方を考えていきたい。</p> <p>生と死が非常に近い場所での勤務であり、少しでも多くのヒントを頂きたい。</p>
小田	<p>私の学校も含めて、最近子どもたちが簡単に「死ぬ」という言葉を使うことが気になっている。また、簡単に小動物を殺す子どもたちがいたり、逆に簡単に死んでしまいたいと思うような自己肯定感を持たない子どもたちが増えている現状もある。家族が亡くなっても死を実感しない子どもたちが出てきている中で、学校でもっと生命について教える機会を持つべきだと考え、今回は参加させていただいた。</p>
松岡	<p>私は高校数学の教員であり、今回の内容に触れるような機会は殆ど無いが、そのタイトルに強く興味を持ち、深く知りたいと思った。いのちの考え方も昔と今の子どもたちは違っているようで、生きていることが当たり前で、生命に触れる機会も殆ど無いように感じている。</p> <p>実際にいのちの教育を正確に理解することは難しいし、もし出来たとしても自分が経験したことを話す感覚的な授業になりがちで、本質的では無いと思う。生と死について「大切だ」と言うこと自体は簡単だが、問題はその後だと思っている。ぜひ授業の中でも扱っていききたいテーマである。</p>
小松	<p>私の学校は中学校と隣接した小学校であり、全校生徒で20人ほどである。最近気になることとして、家族の死を子どもたちが理解できていない現状があるようで、「いなくなった」という感覚のようにしか感じていないようだ。いのちの教育について、生徒の発達に応じて段階的に教えていくにはどのようにすればいいのか、その伝え方を教えていただきたい。</p> <p>また、学校や自宅が山の中にあるということで、虫などを殺すことが生活の中で必然となっている。それらと生命のあり方との兼ね合いをどうバランスを取ればいいのか、学びたい。</p>
小田島	<p>私の受講理由はやはり恩師である中村先生が講師だからであり、新しく始めた研究について興味が湧いた。また、自分自身が死に関する物語や小説につよく惹かれていたことや、自分が出産したことで生命に対する見識が変わったこともある。</p> <p>例えば保育園に通う子どもが、死ぬということを考えて、死ぬことは怖いことだと感じ、お父さんやお母さんがいなくなったら嫌だと言う瞬間があった。その時にその子どもに何をどう伝えればいいのか、分からなかったことが強く記憶に残っている。</p> <p>私の学校でも、授業の中で生と死を扱った教材が多数あり、また総合的学習の時間では「尊厳死」をテーマにディベートを行っている。それらの時間に生徒たちが本気で考えているのに、自分が伝えない何かを言葉に出来ないことが多々あり、自分の中ではショックだった。自分自身が深く考え、さらに生徒に伝えられるように、しっかりと勉強させていただきたい。</p>
石川	<p>私の勤務校は高校生しか居ない支援学校であり、県内各地から生徒たちが受験をして入学してくる。開校して10年が経つが、当初は能力的に高い子たちが多く、普通高校と似た指導や雰囲気があった。しかしここ数年間は生徒たちの理解力や能力が低下している傾向があり、身体の成長や心の発達でアンバランスさを見せる生徒や、小中学校でいじめに遭ったことで自分が持てず、自己肯定感が薄い生徒たちも多数出てきている。</p> <p>私自身は保健担当として性教育を立ち上げ、立ち上げからずっと関わってきたが、そろそろ煮詰まってきた部分もある。また、性だけでなく生についても教えたいと考え、試行錯誤している。三年間の学校生活で、どうすればバランスよく様々なことを教えられるかを学んでいきたい。</p>
佐々木	<p>今回受講した理由は、元々自分が岩手大学国語科(望月研究室)の出身であり、当時からお世話になった中村先生の授業を受けたかったということが発端である。自分自身が出産も体験し、いのちのかけがえの無さを実感したが、だからこそ虐待やネグレクトの報道を目にすると涙を流してしまう。本来子どもたちは愛情を受けて育ててきたはずで、その彼らに改めて少しでもいのちの大切さを教えていくためにもぜひ今回お話を伺いたいと思った。</p>
尾形	<p>私は主に公民科を担当しており、現代社会では生命工学や生命倫理の分野で今回の内容を扱う。もちろん知識としては扱えるが、その先をどう考えるか、どう扱うかという点については感覚的に分かっていても説明を求められると苦しい部分がある。頭で理解できているようで理解できていない気がしているのだ。</p> <p>また、二人目の子どもは最近生まれ、出産にも立ち会えたのだが、最初の子どもが生まれてから生きることや死ぬことが最近身近になったように思っている。例えば雪道で車を運転しているとき、もし自分が死んだら、ということをもたに考えてしまう。教科書の用語だけを伝える授業ではなく、自分の中にあるものを言葉として整理する機会を欲しかったので、今回この研修を受けることにした。</p>
中村	<p>皆さんありがとうございます。ここまでで受講者の自己紹介や受講理由を伺ったが、今回はあえて「考える場」としてこの場を設けた。ぜひそのつもりで参加してもらいたい。では、我々岩手・生と死を考える会からの助言者にも自己紹介してもらおう。</p>
千田	<p>私がこの分野に興味を持った理由として、後付けのものはたくさんある。生徒の死や同僚の死がそれだ。</p> <p>しかし、根本的な理由としては、一緒にこう言ったことを考える仲間がほしいと思ったからだった。答えの無い問いをひたすら考えてみたかったのだ。一人で考えることの問題は行き詰まってしまうが、死というものを深刻に考えずにみんなであい飛べるように考えていきたい。国語教材でもこういったテーマを持った作品がたくさんあるので、そちらでアプローチをしていきたいが、生徒たちと楽しくそういったことを話せる場を持ちたいと考えている。</p>

中村	<p>元々生と死という問題に関しては関心を持っている人はたくさんいるのだが、数年前に千田さんと偶然会って、生と死を考える会を立ち上げてみようという形になった。小規模な会ではあるが、最低2人いれば話し合える、という精神で最近はやっている。</p>
阿部	<p>私は教員としてはある意味変わった経路をたどっていて、まず青山養護学校時代は院内学級の遭った学校だったので、若い頃に生徒に死なれたことが色々と今に影響を与えたように思う。その後久慈農林高校で福祉教科を担当したが、その時には子どもたちが命に触れる感覚に疑問を感じる出来事が多数あった時代だった。しかしその頃はインターネットや本で生命や生と死の問題を扱った内容がほとんど無く、苦労した記憶がある。その後みだけ養護学校奥中山校の小学部を経験したが、当初不安はあったものの、子どもたちから色々癒しを与えられたことが印象的だった。その頃に、10年研を受講するのだが、当初は養護学校を対象としていなかった中村先生の講義を何とか聞きたくて頼み込んだ。それが現在の縁に繋がる。それぞれの校種に合った内容をこちらからも提供したいと思う。</p> <p>ところで、生命に関して考える人々は、幸せな経験をしている人が多い。言い換えれば正常な経験をしている人である。自分たちがいのちの大切さを感じるからこそ、こういったことに関わっていききたい、学びたいと思うようではないだろうか。</p> <p>私事で恐縮だが、今春に卒業生を送り出して以降、少し鬱状態となっている。その中で色々学んだことがあるが、まず病気に起因する死が多いということ、そして精神疾患でもカウンセリングが通用するレベルの人とカウンセリングでそのまま引きずられる人がいることが多いようである。</p> <p>ちなみに先ほど段階に応じた生と死の教育の話が出たが、死の適時性という問題では、具体的に死を理解できるのは小3ぐらいからと言われているので参考までに紹介したい。</p>
中村	<p>大人は本来当たり前のように「死ぬ」ということを考えるはずだが、それが当たり前ではない世代があるのは事実である。そもそも我々は誰もが死を体験していない。「生」というものであれば、女性なら出産体験をして、男性ならその瞬間に立ち会うことがあってもである。</p> <p>いのちの大切さについて考えていく上で、教育現場の現状を俯瞰すると、正直なところでは頑張っている教育委員会と頑張っていない教育委員会、そして頑張らざるを得ない教育委員会が存在するのは事実である。例えば兵庫県教委の例があるが、阪神大震災を体験した兵庫県では、親を亡くし、クラスメイトを亡くした子どもたちがたくさんいて、心のケアに本気で取り組まなければならない自治体である。そしてその数年後に酒鬼薔薇事件が起きた。子どもたちが実感する、生きる喜びとは何なのかを考えていく上で、資料を見ていただきたい。兵庫県教委で、現場の先生方も関わって作成した資料である。</p> <p>この資料で中心的なテーマとなっているのは、自己肯定感の存在とそれを実感させる手はずであり、そのことを小学校低学年から高校までの期間でどのように取り入れていくかを学年ごとに目安化している。子どもたちに実感させる生きる喜びの工程表と言っても良い。内容としては、褒められ体験、自分の良さを発見させる体験、自分を受容させる体験の順に工程表が進んでいく。結局、この資料からも分かるように、最後は受容するしか無いのである。生きていくだけでいいんだ、ということである。</p> <p>もし仮に、自分の一番身近な人間の存在がなくなったら、私は喪失感で間違いなく何も手に付かなくなる。そもそも自分がなぜ存在するのかという理由の一つは、やはり妻や子など身近な人間の関わり合いがその理由の最たる一つである。しかし、それは理由としては薄いと言っても良い。寿命の問題で、生きようと思っただけでもいつか死別してしまう。自分の娘の10年後を考えたとき、またはもし人間として目処が立った頃の娘を考えたとき、果たして自分が一緒にいられるのかな、と思う時がある。</p> <p>次に兵庫・生と死を考える会で作成した資料を見ていただきたい。これは死生観に関するアンケートである。普通はこういったテーマのアンケートはなかなか出来ない。多くの学校から解答辞退の申し出があったそうだ。昨今の例があった兵庫県だからこそ出来たアンケートではあるが、しかしそれでも辞退する学校が存在するのは、そもそも関わりたくない話題だからだろうか。</p> <p>資料の冒頭にはマリア・ナギーの研究について論述があるが、その内容は子どもの発達段階による死の受け止め方の違いについてのものである。段階に分けていくと、まず5歳以下の子どもには死の実感は不可能で、5歳以降で何とか一度死んだ人間が生き返らないことを実感でき、9歳でやっと死の普遍性（誰でも死ぬこと）や絶対性（生き返ることが不可能であること）を実感するとされている。兵庫県教委のアンケートでは、対象者を4歳から14歳として規定しており、子どもたちの生死に対する実感や意識をはっきりと認識したいという思惑が見取れる。</p> <p>内容を更に読み進めていくと、小学校低学年のデータでは、葬儀や墓参りの経験は、その後の死生観の構築に影響する。家族が墓石や死者に語りかけることが、死者とのコミュニケーションだということだ。また、死を怖くないという子どもたちが存在することもこの資料には書かれているが、その理由は死んでも生き返られるからというものだから驚きだ。実際に、小学校低学年でも死に対する意識として、人間は死なない、またはわからないと答えた児童が10%程度いるというデータがここにある。また、毎日3時間以上テレビやゲームに接する子どもたちは、人間が生き返ると思い込んでしまう傾向にあること、年齢が上がるにつれて子どもたちの自己肯定感が下がること、そして家族に大切にされない子どもたちは死の普遍性への認識が薄いことがここで分かる。</p>

資料P6 兵庫県教委
『「命の大切さ」を実感させる教育への提言』より、表1子どもたちが実感する「生きる喜び」

資料P7 兵庫・生と死を考える会編・東京書籍『子どもたちに伝える命の学び』より、「ゆらぐ子どもの死生観」

小松	そういえば、小学1年生の子でも葬式に出て自分の祖母の死を実感できないということがあった。	
中村	え?と思いつながら、あり得る現状だと思う。	
小松	ただ、この資料にあるようなゲームを3時間ほどやる子どもたちは多くはないのではないか。	
阿部	データとしてはその通りだと思う。私自身、過去の卒業生が葬式に参加した際に、祖父の死を目の当たりにして初めて死体への興味を示したということを聞いている。	
中村	そもそも、葬式に参加する子どもが今はそれ程多くない。	
阿部	<p>多分その子は、亡くなる過程を見ていくことがこの年齢になって初めてだったようだ。生徒たちの場合は、面会謝絶の部屋から突然死を突き付けられるケースもある。死の認識がないこともまた、現代では成長のひとつの形なのではないか。</p> <p>一例をあげると、神戸の震災について神戸市教委から語られた内容に、子どもたちが震災ごっこをしていたという事実が語られている。親から見れば現象的に許しがたい行為であるが、しかしそれが心理学的な観点では受容や死の認識の行為として受け入れられている。長崎で起きた小学生の殺人事件の例を振り返ると、長崎という地域がそもそも道徳教育に関しては先進県であったはずだった。しかし、それ故に先生方にノーと言えない子どもたちが、逆に鬱屈してしまった現実があるのかも知れない。</p> <p>生徒がこういうことを話題にできる教員・場所の必要性が問われている。</p>	
中村	<p>長崎の事件では、事件後に加害児童が「(被害児童に) 会って謝りたい」という言葉を残している。子どもたちにとっては、目の前で起きていることがバーチャルなのではないか。</p> <p>では、先程の資料に戻って話を進めていきたい。小学校高学年のデータを見ると、死の普遍性は確立しているが、絶対性については8割に満たない児童しか身につけていない。他方で、死にたいと思ったことのある子は学年の上昇に沿って増加している。自殺他殺に対する共感度、許容度が漸増しており、それは特に死の普遍性が確立出来ていない子どもたちの中で顕著である。</p> <p>また、年齢が上がるにつれて死への恐怖が減少しているようだが、そもそも死への恐怖を持たない子どもたちは死の普遍性が確立していない傾向にある。なお、高学年では墓参葬儀の経験の有無と死の普遍性・絶対性の認識率の関連性はあまり見受けられない。死ね、殺すぞなどという言葉を用いる子ども、自傷行為をする子どもも死の普遍性の認識が低い傾向にあることもデータにある。その他、テレビやゲームなどでの殺人シーンや暴力シーンに対する興味が高い子、格闘ゲームや殺人ゲームが好きなのは死の普遍性・絶対性とも認識率が非常に低いとされているようだ。</p> <p>そしてこの年代では、自己肯定感が一貫して低下する。特に女子にその傾向がある。ナイフを持ってくる生徒の増加も述べられている。命の大切さを誰かに教えてもらった子どもは死の普遍性の認識が強いとされているが、その理屈から進めると、リストカットや自傷行為をする子どもは死の普遍性に対する認識が低いということなのだろうか。</p>	
千田	<p>他県よりも岩手の子どもの方がゲームを持っている生徒が多いのではないだろうか。テレビの視聴時間が多いというデータもある。岩手の子どもの傾向としては、スポーツ少年団に加入して何か運動に時間を費やすか、または家の中でゲームをひたすらやるかという両極端な傾向が見られる。</p> <p>また、自己肯定感の低下などがより女子に顕著な理由としては、精神年齢の高さが原因ではないだろうか。男女での精神的な年齢差は約4~5歳ほどという。また、男子の読む本と女子の読む本では明らかにその内容に差が見られる。</p>	
阿部	<p>岩手県の中学生在が自己肯定感が低いという問題があるが、これは地域性的問題ではないだろうか。簡単にいえば、「先が見えてしまう」ということだ。進路的な問題では、ここで何を頑張るのか、または頑張っても行けるものの限界が見えているという意識が子どもたちにあるように思う。これは岩手に限らず、都市部より田舎で顕著な傾向なのではないか。</p> <p>また、女子の自己肯定感が低い理由としては、第二次性徴によって自分を見なければならぬことが挙げられるように思う。</p>	
千田	先程の阿部さんの話に近い部分だが、岩手県の教員では50代で管理職になるかならないかでその後の教員生活のモチベーションに大きな差が出ると聞いたことがある。	
阿部	<p>例えば野球でも岩手県は甲子園に出るまでが目標であって、だからこそ甲子園に行っても負ける。目的意識や現状の認識による結果だ。</p> <p>また部活の中でリストカットを流行させる傾向もあるようで、先輩がやったからとか、あいつに先をこされて負けたくないというブームでリストカットをする子どもたちがいる。その中に、実は本当に自ら自傷行為に走っている子どもたちが隠れている。</p>	
中村	そういえば、ナイフを持っている生徒の存在の件も先ほど挙げてみたがどうか。	
阿部	例えばバタフライナイフのブームは今から15年ほど前だが、生徒指導の先生方の間ではかなり問題視された事案だった。しかし、心理学的にはあくまでブームのようなものだからと大して騒がれなかったようだ。	

中村	<p>年寄りの話をすると、90歳以上の人々はここまで生きればもう死ぬことはないのではないかと思いはじめようだ。それでも普遍性はあり、いずれ死ぬということは事実だ。</p> <p>子どもたちの自己肯定感の喪失はやはり先を見てしまうからだろう。子どもたちが将来的に不安な現状があり、高校を出ても就職すらない状況だ。非常に時代に閉塞感があり、夢がない。将来就きたい職業のトップが公務員だという話もある。</p> <p>また、教員の分野もそうで、教員採用の枠はどんどん狭まっている。今年の中学校国語科の採用数は岩手県で3名だった。また、学部としても困っており、入学時は小学校と中学校を一括して募集する形態を採っているが、入学後のアンケートでは中学校を希望する生徒の方が圧倒的に多く、採用数との兼ね合いや実習先の確保が問題視されている。</p>
阿部	<p>我々が子どもたちに手を加えられるのは、小学校の高学年からとっていいと思う。</p> <p>例えば、携帯電話の所有について、石川県小松市は一定年齢未満の所有を市として禁止している。また多数の自治体ではブログの監視を行っている。環境づくりからまずは実施していかなければならない。</p> <p>また、バイクで事故を起こした生徒がまたすぐに乗り始めるような場合、それはこりていないというか、自分は死ぬと思っていない。ある意味、死の普遍性を持っていないとも言える。</p> <p>なお、兵庫県教委のデータの前提として、一定量は発達障害の生徒であるということは留意すべきだ。また、この年代の自殺率・自殺者数はそれほど高い数値ではないという前提条件も認識として必要だ。</p>
本間	<p>ちなみに、一定量の発達障害生徒ということについて、何か資料はあるか。</p>
阿部	<p>宇治少年院の事例が本になっているので、ぜひご覧頂きたい。また、明治安田こころの健康財団で実施している講座を受講すると、色々知ることができる。</p>
中村	<p>私自身も、生と死の教育について色々十全発表などを見に行った。しかし、頑張りすぎている先生方の発表を見ると、妙に重さを感じて、うーん…とってしまう。</p> <p>また、再び兵庫・生と死を考える会の資料を見ていただきたいが、死ぬ、殺すぞという言葉についての認識についてはこの資料に疑問を感じる。資料では、年齢が上がるにつれて「使ってはいけない言葉」という認識が減り、冗談や遊びの一つとして使用するケースが増えたとある。また、毎日そのような言葉を使う生徒たちの、死の普遍性の神式の割合は低いとしているが、それはどうかとも思う。</p>
三浦	<p>生徒の様子を見てみると、そのような言葉を使う方の意識は軽い。しかし言われる方の心にはぐさぐさと刺さる。そのような言葉の使用が増えてくれば、すぐに集会を開くように学年団では決めている。</p>
小田島	<p>逆に高校では、たまに使ったり使われたりする光景を見るが、お互いに冗談として認識しているようだ。特に指導はしていない。</p>
中村	<p>先生方で、使われるときの見極めは必要だと思う。仲間意識を持った中で使っているかどうかという点で。</p>
三浦	<p>仲間関係を維持したいから、言われてもショックは見せないが、内心はそうではないと思う。</p>
阿部	<p>中学校と高校では人間関係にも違いが出てくる。高校では付き合いたくない人間は放置しても、あまり影響はない。私の授業では毒蝮三太夫の発言の事例を扱った。大事なことは言葉よりも関係性だという主題だったが、生徒は理解してくれた。</p> <p>同様に問題視される言葉として、キモイ、ウザイがあるが、キモイと気持ち悪いという二つの言葉の違いを見るべきだ。生徒たちが本気でそう思って使っているのはむしろ気持ち悪いの方だ。</p> <p>また、直接の言動もだが、むしろメールやブログでの発言の方が実は怖い。その方が生徒は言葉を選ばず、受け止める側も衝撃は大きくなる。</p>
中村	<p>阿部さんの話にあった毒蝮三太夫の例では「ババア死ぬ！」と言われても、聴き手にとっては愛ある言葉として受け取ることができる。これは彼流のコミュニケーションだという前提が不可欠である。</p> <p>先程の話にもあったが、校種間での違いはやはり留意しなければならない。同じ言葉でも小学生の方が衝撃は大きいし、彼らの方が残酷な言葉を使う。しかし管理し過ぎるのも逆に怖い状況を生み出しかねず、飛び交っている言葉がどのような意味合いで使われているかはしっかり見定めなければならない。</p> <p>話題は少し変わるが、高度技術社会という言葉がある。これは自然を実感しにくい生活環境であったり、究極の自然現象である死を隠蔽する社会として捉えられることもある。70年ほど前は死体が日常生活の中にゴロゴロしていた、現代の異常こそが正常である世界だった。しかし現代では「生」を前面に押し出し社会や教育が成り立っている。いわば死は除け者である。例え動物のものであっても、子どもたちに死を直接見せない社会である。ディスプレイを通してたくさんの死の情報があるにも関わらずだ。やはり今後は命の有限性に触れる教育や体験を尊重すべきだろう。ペットロスにしてもそうだが、普通の生活の中で学べる死はたくさんある。また、家族の存在も重要で、その家族の中でその子がどのような状況におかれているかも、いのちの教育では重要視される。</p>
阿部	<p>仙台に舌が不自由な子どもたちが通う学校がある。そこでは宿題として小学6年生に「お母さんに抱っこしてもらおう」というものを出している。親に大事にされている有用感や自己肯定感を子どもが実感でき、また親にも自分が生んだ子どもの存在を実感させる狙いがある。</p>

中村	<p>スキンシップが無くなったことも、色々と影響が出る。お前が大切なんだよ、ということを言葉でも行動でも実感させたい。喜ぶときや嬉しいときのハグは、人間同士が繋がる存在であることを実感させる。</p> <p>そもそも自己肯定感、人と繋がっている実感でもある。映画の中で泣ける場面として個人的に好きなのが、風間杜夫と片岡鶴太郎が出演した『偉人たちの夏』という作品のワンシーンである。歳をとった男が、亡くなった両親に出会う映画で、今の自分よりも両親の方が若い設定だ。その作品で親から「俺はお前のことを誇りに思っているよ」と言われるシーンがあり、どうしようもないと思っていた自分の人生でも両親は認めてくれ、頑張ったなど声をかけてもらえた所で涙する。</p> <p>やはり教員の役割は「お前はよく頑張ってきたよ」と声をかけることであり、「お前はお前で大丈夫なんだよ」とそいつを認め、エールを送ることなのだろうと思う。先行きのない社会に絶望以外の何かを見せることと言ってもいいだろう。</p> <p>そして、その一つとしてのいのちの教育は、やはり生の言葉で語られるべきことだろう。先生だって分からないことがあるんだ、と正直に伝えることである。自分の実感と想像力、そしてイマジネーションが鍵となるのだ。ここで何点か作品を紹介しておきたい。今度の小学校教科書の海底で、スーザン・バーレイの『わすれられないおくりもの』と、いとうひろしの『だいたいぶ だいたいぶ』が採用された。両方とも看取りの内容である。</p>
【午後の部】	
中村	<p>午後は「青春トライ」の内容から触れていきたい。これは各高校に配布されているもので、あまり活用されてはいない。ただし目次を見ると、第4章には「いのちの尊さ」という項目があり、実はその内容も深いものである。今回のテーマでは、教員はコーディネーターとしていく立場であり、場作りをする立場にいる。</p> <p>ここで資料の中から山田泉さんの話をしていきたい。彼女は大阪府の養護教諭で、40歳で乳がんを発症し49歳で亡くなられた方だ。一度現場に復帰した際に、中学校で「死ぬ」「殺す」といった言葉をお互いにぶつけ合う現状に辛さを感じ、退職を検討した時期もあった。しかし、改めていのちの授業を続けていき、色々なゲストを呼び語り合わせることを行った。ハンセン病療養所に生徒たちを連れていったこともあり、子どもたちがそのことから進路や自らの行き先を決めていったという。彼女の方針としては、自分が何かを語るのではなく、あくまで場作りをすることを中心に行ったことが挙げられる。私や千田さんも、実際に山田さんが亡くなる2〜3ヶ月前に講演を聞いた。動き始めたらつながりが出来てくるものだ。</p> <p>また、いじめを例に取り上げると、いじめた側がどういじめていったか、覚えていなかったり実感出来ていなかったりするケースが多い。しかし、資料の中で取り上げたが、いじめ自殺をした子どもの親の講演というものも行われている。表面上の言葉だけではなく、その辛さを実際に体験した側の一人の言葉であり、実感は強く伴う。また、東京都の和田中学校の事例では、自殺防止のロールプレイングも行われているという。</p> <p>今回の資料では、山下文夫先生の自殺擬似体験についての授業を取り上げた。自殺に急激に飛び込む要因としては、例えば死の普遍性の認識の不足、マスコミの報道の仕方、子どもたちの耐える力の不足、自己肯定感の喪失などが挙げられている。それを親の立場に立って、仮に自分の子どもが自殺したときの様子を想像させて、命は自分だけのものではないということを実感させるという。避けることが出来る死と、避けられない死の区別はやはり存在する。</p> <p>いのちの教育は、すでに本屋に行けばたくさんの資料があり、一時間試しにやってみようかな、という軽い試みも今では可能だ。生徒は「何のために生きるんですか」「先生は今幸せですか」「幸せって何ですか」という質問を投げかけてくるが、結局それは教員に対して人生観を尋ねているといってもよい。それに対してその教員自身の生の声を返すことが大事ではないだろうか。もちろん教科教育よりは面倒くさい。しかし、例えば遺伝子の話を理科でする際にそれに盛り込みつつ行うことも十分可能なのである。</p> <p>資料には一人の子どもが生まれるまでの図として、逆ピラミッドの図が掲載されているが、これはみんなが繋がっているのだということを表すために使う。そしてそのことを通して何を伝えたいかが問題だ。生徒に対して突然「あなたにとって精一杯生きるとはどういうことでしょうか」と突然尋ねてみることもある。</p>
<p><原先生の授業ビデオを鑑賞></p> <p>「私たちは可能性を託された存在」であり、終わっていくことを知っているのに生まれてきたのだ。私たちはなぜ生まれてきたのかを問わなければならない。DNAの仕組みは大いなる力が働いて出来上がった唯一無二の存在であり、その力によって生まれ低下されている以上、勝手にその人間自身が生きる・死ぬという判断は出来ないのだ。</p>	
中村	ユニークな授業だと思う。生徒もちゃんと原先生の問いに答えていた。資料を踏まえて、それぞれの感想を聞かせてほしい。
三浦	同じ理科教員なので、映像を楽しく見せてもらった。生きる方にだけ焦点を当てて授業をしてきたが、死の存在から見る生について、大変なことだし答えがないことではあるにしても、やはり大事なことだと思う。
本間	私たち教員側だったら、このような映像を見ても理解できる。しかしこれを学校に持ち帰って生徒に教えても、やはり知的レベルの問題からなかなか教えにくいし分かってもらえない。これをどのようにレベルや言葉を平易なものにしていけばいいか。学校でなければ教えられないものもあるということに改めて実感した。
中村	特別支援学校だと通常の学校教育の年齢に応じた指導をただ行くと誤差が生じてきてしまう。それにどう対応するかを考えなければならない。

伊藤	さっきの映像では、DNAの中に生の情報と死の情報が入っているという内容があったが、どうしても我々は生にばかり目を向けてしまう。しかし、このDNAによるつながりが、人々の人生の中で受け継がれるものであるのなら、だからこそ死というものが怖くないと思えるのだと思った。
中村	原先生はあくまで生物の先生という前提でこの授業を実施なさったのだと思う。 死の一人称・二人称・三人称という言葉があるが、三人称の死にはもう慣れてきているように思う。ここからは死をできるだけ引きつけていかなければならないと思う。いわば1.5人称の死として。 生命工学のテクノロジーの進化は著しいが、それを自分の命として考えていくことに、追いついていかなければならないと感じる。知識としてはわかるが、それによって自分という存在はどう変わるのかを考えていかなければならない。
小田	死生観を意識して行動を見直すことが分かっただけでも良かった。自分のこととして死を考えていく、そして誰かと一緒に考えていく機会を持つことがそもそも大事だ。本気で、本音で取り組んでいくことが必要だ。
松岡	先程の映像は、学校の指導としてはこういう形式も出来るのだなと実感させられるものだった。体験や経験がなくてもやっていけると感じたし、知的な部分からのアプローチもやはり分かりやすい。 自分の過去を振り返れば、テレビやゲームにたくさんの時間を割き、葬式はお通夜だけ行けばいいと思っていた。それでも死を軽んじているわけではないと思えば、納得である。
中村	その点では兵庫・生と死を考える会の調査も一概に正しいとは言えないだろう。
小松	個人的には午前中の内容が大変面白かった。生命の認識が発達段階で違っていると分かったことが収穫だった。 自分もリстокットをする子どものことを思い出した。もしかして痛みで自分を実感する行為かもしれないし、生きたいこととの隣り合わせでもがいている行為なのかも思う。 「死ぬ」という言葉については、もちろん関係性の問題ははらんでいるが、私はやはり小学1年生の自動であれば駄目だと伝える。ただし、頭ごなしには絶対に言わない。そこには語彙不足の問題もあり、他の言葉でその不快感を伝えられればと思う。
小田島	やはり自分はこれまで死というものをタブー視していた。踏み込んではいけない部分だと感じていた。しかし、ちょっとしたきっかけで踏み越えていいものだった。私自身が、生徒たちに自己肯定感を持てる環境づくりを今出来ているのかどうか考え込んでしまった。
中村	大学の総合演習でこのテーマを扱うと、生徒からの関心が大変強く現れる。学生たちの中でも考えたい、話し合う場が欲しいという気持ちの表れではないかと思っている。とにかく場作りをすること、体験させていくことが大事だと思う。 これまでの教育の中で、特に高度経済成長期以降の「生きる」ことがメインの教育では欠けていた観点だったと思う。
石川	過去の生徒を思い返した。リстокットや心無い発言をする生徒たちの、その裏の気持ちを察することが必要なのだと思う。なぜそのようなことをするのかと考えなければならぬ。また、そういった言葉のやり取りを出来る関係性でも、何か他の言葉や形でやり取りできる関係が作れないかと考えている。 私の学校は普通校とは違う支援学校であり、その世界には裏の意味を捉えられずに言葉をそのまま理解する生徒がほとんどだ。そういう言葉はいけないという指導がやはり大切だ。 そして、唯一無二の存在である一人ひとりが、違っていいんだ、自信持っていんだよということを伝えていきたい。
佐々木	ドーキンスの言葉で「DNAの運び屋」というものがあるが、そういえば授業で扱った記憶がある。その中で手と手を取り合わせてつながりを意識させることも出来たと思う。そんなに生と死の授業だからと、構えなくて良いのだと思った。
尾形	正直なところ、もやもや感は増した。考え方を整理しようと思って受講したが却ってぐちゃぐちゃになった。しかし、答えが無いということは私自身がある程度ぐちゃぐちゃであってもいいんだなとも感じた。 授業の中ではある程度を超えたものは踏み込められないとタブー視していたが、しかしそこに飛び込んでいかないとこういう場で身につけた知識や考えもただのテクニックでしかなくなるのだろう。
中村	みんなに投げかけて、みんなが持って帰る問いなのでは無いだろうか。データだけ渡してしまったり、出来ることならすっきりして帰っていただきたいが、生きて行くこと自体が戸惑いながら捉えていくものだから、しょうがない。
阿部	死を教えていこうとしても、いつか生につながるものだ。求人票で、職種:おくりびと、と書かれたものがあった。その人を送ってもらう方法を考えるのもまた生き方だ。 ただし、答えがないと言っても駄目なのは駄目だと言わなければならない。そして、語彙の不足という話があったが、動物をばらばらにしくても人の死は感じられるものだろう。
中村	『豚のいる教室』で豚のピーちゃんをどうするかと考えたとき、すでにピーちゃんはペットであり、食べる対象ではなくなった。逆に金森先生の実践では、鶏の命を絶って食べることを行う。 しかしこれをやらなくても考えさせようと思ったらいくらでも出来るし、日下先生の実践では身近な生活の中に考える材料がいくらでもあるんだということを理解できる。「生命を尊重するがゆえの死」として、蜘蛛の巣

	に蝶が引っかけたいたらあなたはどうか、という問いがあるが、子どもたちが答えの矛盾を抱えることですでに目標は達成されている。家で家族の人と話してあってごらん、とさらに巻き込むことも出来る。これも学年によって内容を変えていき、小学5年生に実施する時にはそこに自然界の法則についての内容を含められる。「人間に食べられる動物は、どんな気持ちかな」という問いも、また様々な答えを生む。生命は仕方なく奪われるものか、それとも自らプレゼントしたものなのかということである。
阿部	答えが出ないことは、基本的に深入りしないほうがいい。子どもの言いつばなしでいいのだと思う。
中村	宮内浩二さんの実践例では、それについて高校生が書いた作文を教材に中学2年生へ問いを投げかけている。
千田	分からないことが増えていくということが大事である。倫理の授業を小学生に落としこんでいくとき、ある種の矛盾を織り込んでいってもいいのではないかな。また、宮内さんの教材についても、文章を区切り区切り提供していけば面白い。仮説実験授業として、国語や道徳でやっていければ良いのではないかな。 ちなみに、旭山動物園の方のお話に、豚や牛は種族として「家畜である」ことを選んだというのがあり、興味深い。
中村	出産についてあげられる先生が多かったが、そのような映画を見ても良い気がする。野田聖子議員の体外受精の話題もあったが、今や10人に一人が不妊治療をしており、56人に1人の新生児が体外受精で生まれる時代である。もはや授かりものではなく、テクノロジー先行の状態で人間の欲望によって生まれている子どもたちなのだ。例えばiPS細胞による生殖技術が生まれたが、男がいなくても女が子どもを埋める時代にもなっている。これから10年20年先は予想も出来ないほど科学が進化する時代になるはずだ。その中で社会がどうなっていくのか、我々がどうしたいのかを考えていなければならない。 私は日本尊厳死協会の会員だが、自分の父の死を見た影響から入会した。寝たきりの父を見て、これは親父の本懐ではないだろうと感じている。リビングウィルも、段々と病院で取り入れ始めている。延命が本来前提の病院医療の中では、自分がしっかりやらないと、逆に望む死すら来ないはずだ。最近では森岡恭彦の『医の倫理と法』が医学部の学生の教科書になっているというが、終末期医療について医師もしっかり考えていかなければならないのだろう。 また、今年は脳死・臓器移植の問題に終始した一年でもあった。すでに流れとなるものが出来ているように思う。高校国語の教材でもクローン技術の問題が取り上げられており、自分達の意識の変化についても関心が向けられている。 現代は代替可能なものに囲まれている現状であり、対価をかければ交換可能だったり、社会経済自体が交換で成立している。もはや「かけがえが無い」という言葉を実感できる世の中ではない。 情報は腐るほどあるし、その中でいのちの教育は、やるかやらないかというだけの段階なのである。そして受け入れていくしかないし、受容していくしか無いのだと思う。いわば『Let It Be』の世界だ。自分を受け入れ、相手を受け入れ、お前自身を受け入れるしか無いということだ。 それでは最後に、今日の感想を聞いてみたい。
尾形	結局もやもやしている、ということに尽きる。
佐々木	生と死という重いテーマだと思って覚悟してきたが、楽しく学ばせてもらった。
石川	自分自身では整理出来ていないが、話を聞くだけではなく、資料などを踏まえて学ばせてもらった。
小田島	楽しく勉強させてもらった。自分でも死や生のことを考えてきたものの、はっきりと分かってはいなかった。しかし、そのままでもいいんだなと思えた。
小松	一人の人間として勉強できた。この先、今日のことを思い返しなが生きて行くのだろう。
松岡	身近なところに題材があるんだなあと実感。映画好きなので、そういえばこんな作品もあるなあと思い返せた。
小田	アンテナを高く張り、情報収集をしていきたい。今受け持っている生徒たちが卒業する前には一度やってみたい。
伊藤	生と死とか、そういった話題を話し合える場がなくて、今回は大変良かった。お互いに話しあう中で深め合えることなのだと思う。
本間	教材を研究したり、ゲストの方をお招きしてやっていけることが分かってよかった。こういう場にまた参加したい。
三浦	これまでに教育界で死が遠ざけられていたことを実感した。抱っこの話などあったが、生き物を扱う立場の教員として様々に取り組んでいきたい。
中村	では、まとめとして阿部さんをお願いしたい。
阿部	何年前かならば難しいだろうと思っていたことでも、今年の先生方からはやってみようと言ってもらえたことが良かった。少し前は教材がないと思っていたのだが、時代の流れと共に増えてきて、過激なものも減ってきたように思う。発達段階でどう扱っていくかをもっと深く考えていきたい。 また、教育相談の分野や道徳との関わりも今後の課題で、教科書や心のノート、青春トライをもう一度見直して使ってみようと思っている。